

# 銃 砲 史 研 究

第389号

---

## 目 次

### 論文

- 下関戦争で使用された大砲とその技術格差  
—各国に現存する大砲と長州側及び英国側史料を中心として—・郡司 健・・・( 1 )
- 赤松小三郎と銃・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・関 良基・・・(28)

### 報告

- 阿波徳島藩領の鉄砲に見る目当ての形状と機能について・・小西 雅徳・・・(43)
- 資料紹介「火縄銃改造管打ち式馬上筒について」・・・・・・後藤 智輝・・・(49)
- 小川家文書「高嶋流弾丸之図」・・・・・・・・・・・・・・・・・・峯田 元治  
中江 秀雄・・・(55)
- 銃砲史研究執筆要項・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・・(72)
- 



令和2年4月

日本銃砲史学会

# 下関戦争で使用された大砲とその技術格差

—各国に現存する大砲と長州側及び英国側史料とを中心として—

郡司 健（大阪学院大学経営学部教授）

## はじめに

文久3年(1863)に長州藩は幕府の攘夷決行の布告にしたがって下関海峡を通過するアメリカ・フランス・オランダの各艦船を砲撃し、米仏からは報復攻撃も経験した。翌元治元年(1864)にはイギリスの主導のもと英仏蘭米の4ヶ国連合艦隊が数倍の兵力でもって下関に来襲した。それは、もはや長州にとって攘夷戦争というよりも自藩(防長二州)の防衛戦争の様相を呈していた。

このいわゆる下関戦争において長州側はどのような種類の大砲を使用し、どのような種類の大砲が接収され、連合各国に配分されたかについて、現在各国に残されている大砲の分析等も含めてその砲種を整理・分析するとともに、薩英戦争時に薩摩藩が使用した大砲と比較することによって、その具体的な内容がある程度明らかになると思われる。それはまた当時の彼我の大砲技術水準ならびに技術格差を知る上に役立つと思われる。そこで小稿では、下関戦争における各砲台の備砲の分析を中心に考察するとともに、連合側を使用した大砲との技術格差について概略し、あわせて下関戦争自体の意義について若干考察してみたい。

## I 下関戦争の概要

### 1 文久3年の攘夷砲撃戦

文久3年の攘夷砲撃戦では、5回にわたって砲撃戦が展開されたが、このうち最初の3回は、それぞれ5月10日のアメリカ商船ペンブローク(Penbrocke)、5月23日のフランス軍艦キンシャン(Kienchang)、5月26日のオランダ軍艦メデューサ(Medusa)に対する一方的な攘夷砲撃であった。これに対し、4回目と5回目はむしろ米国軍艦とフランス軍艦の報復攻撃として位置づけられるであろう<sup>(1)</sup>。

とくに、4回目の6月1日には米国軍艦ワイオミング(Wyoming)が報復のために来襲した。長州側の軍艦3艦(壬戌・庚申・癸亥)が撃沈されたものの、ワイオミングもかなりの被害を被った。この時ワイオミングはおもにダールグレン砲を使用したとみられる。5回目の6月5日のフランス2軍艦セミラミス(Semiramis)とタンクレード(Tancrede)が来襲したときは、これまでの守備兵は攘夷運動のため京都に出払って、全く手薄のところに来襲し砲台を破壊して立ち去った。

文久3年の下関の砲撃戦における、下関砲台の備砲・兵員等は以下のものであった。な

お、同年の7月2日には鹿児島湾で生麦事件の犯人引き渡しと賠償金支払いを求めてきた英国艦隊と薩摩藩との間で砲撃戦がなされた(薩英戦争)。

<文久3年の下関各砲台備砲・軍艦>

砲台	大砲の配備状況(斤=ポンド;加農砲=カノン砲)
専念寺	長砲1門(種類不明)
細江	20寸(拇cm)白砲(約80斤)1門
前田	24斤加農砲3門、18斤加農砲2門
杉谷	150斤白砲1門、忽砲1門
壇ノ浦	(第1壘) 18斤加農砲(カノン)2門 (第2壘) 12斤長加農砲4門 (第3壘) 80斤仏式砲(ペキサンス砲)1門、100斤白砲1門
亀山社	18斤加農砲4門
弟子待	荻野流連城砲7門(一貫目玉青銅砲)
総計	大砲28門、野砲数10門、砲兵500人、歩兵2,500人
軍艦 (砲数)	丙辰丸(200目玉筒2門、1貫500目玉筒1門)・庚申丸(30斤爆砲6門) 壬戌丸(小砲2門)・癸亥丸(18斤砲2門、9斤砲8門)

2 元治元年(1864)の下関戦争—欧米連合艦隊攘夷戦争—

(1) 四か国連合艦隊の編成

翌元治元年(1864)8月5日には、英・仏・蘭・米の四か国連合艦隊が来襲した。英9隻、蘭4隻、仏3隻の計16隻と米商船1隻との計17隻からなり、キューパー(A.I.Kuper)提督(海軍中将)がユーリアラスに搭乗し、連合艦隊の総指揮を執った<sup>(2)</sup>。

この時、米国軍は、自国軍艦が機関の故障で使用できなかったため、商船ターキャンを雇い入れ、バロット砲(30ポンド砲)などの大砲4門と乗組員を搭載して参戦した<sup>(3)</sup>。

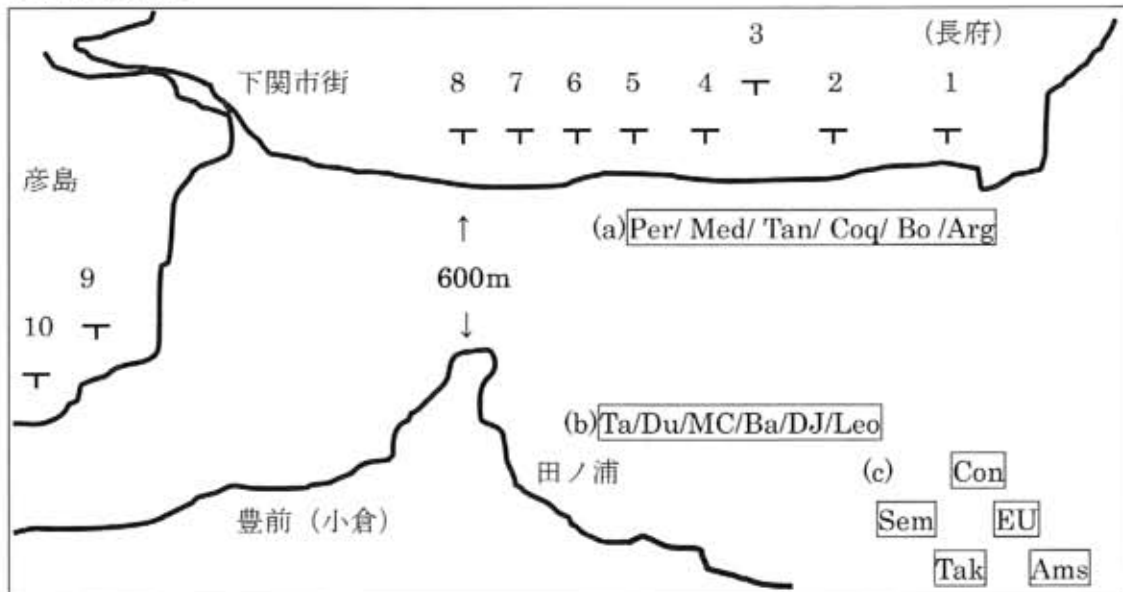
連合艦隊は次のような三段構え(三層体制)で戦闘態勢についた<sup>(4)</sup>。

- (a) 軽艦隊6隻(下関各砲台寄り;英4、蘭1、仏1)、
- (b) コルベット(快走艦)艦隊6隻(小倉側;英3、蘭2、仏1)、
- (c) 旗艦隊5隻(後方;英2、蘭1、仏1、米1)、

がこれである。開戦時の長州側の砲台配置図と連合艦隊の三層体制を図示すれば次頁のように示される<sup>(5)</sup>。

長州側連合艦隊側との戦力を比較すれば<sup>(6)</sup>、兵員だけでなく大砲の数も連合艦隊は2倍以上である。しかも、大砲の性能については、長州側が以前は最強とされたペキサンス砲をはじめとしてすべて「弾丸」を発射する滑腔砲であったのに対し、連合艦隊側は英国のアームストロング砲や米国のバロット砲などの当時最新鋭の大砲をはじめ他の大砲の多くが「尖頭弾(椎実弾)」を発射する施条(ライフル)砲であった。英国軍は後に見るように薩英戦争時よりもさらに大きな兵力を動員している。

<両軍配備図>



(砲台：1=長府、2=黒門口、3=茶臼山、4=角石・前田上、5=前田下、6=洲崎、7=籠建場、8=壇ノ浦、9=弟子待、10=山床。連合艦隊：(a)[Per=Perseus, Med=Medusa, Tan=Tancredi, Coq=Coquette, Bo= Bouncer, Arg=Argus], (b)[Ta=Tartar, Du=Dupleix, MC=Metalen Cruis, Ba=Barrosa, DJ=D'Jambi, Leo=Leopard], (c)[Con=Conqueror, Sem=Semiramis, EU=Euryalus, Tak=Takiang, Ams=Amsterdam]))

<両軍の戦力対比>

両軍の戦力対比						
長州側*			連合艦隊側			
砲台	大砲	人数	連合国	艦数	大砲	人数
前田上下	20	奇兵隊 300名	イギリス	9	182	2,852名
壇ノ浦	14	庸懲隊 300名	オランダ	4	56	951名
弟子待	7	萩野隊 300名	フランス	3	49	1,155名
洲崎	9	長府藩士 160名	アメリカ	1	4	58名
その他	70	940名				
総計	約120	2,000名	総計	17	291	5,016名

(\*長州側データ；末松謙澄『防長回天史』より)

(2) 戦闘の経過

8月5日午後3時40分旗艦ユーリアラスは開戦の火箭を打ち上げるとともに全艦隊16隻は一斉に右舷の砲火を発した。そして、ユーリアラスは艦首の110ポンドアームストロング砲から前田砲台方面に約2,400m(2,500ヤード)の距離を定めて発砲した。その後、連合艦隊は長府から前田・壇ノ浦砲台にかけて集中的に攻撃し、前田浜から陸戦隊を派兵し各砲台を破壊した。

翌8月6日、奇兵隊(軍監山縣小輔)等は使用可能な兵器を壇ノ浦砲台に集め、敵との